

# 大学基礎セミナー I の取り組み

広 谷 大 助・岡 田 高 嘉  
萩 田 信二郎・吉 田 倫 子

## 1. はじめに

大学基礎セミナーIは本学の学部学科再編に伴い、令和2年度から始まった全学共通教育科目の学びスキル・リテラシーに属する1年生対象の1単位の必須科目である。令和2年度の受講生は559名（広島213名、庄原150名、三原196名）であり、本学で最も受講者の多い授業である。平成31年度までは大学基礎セミナーとして、各学部学科が独自に創意工夫を凝らしてそれぞれ行っていた。しかし、各学部学科の専門性に偏り、入学直後の大学生が必要とする能力の教授がされない懸念が存在した。そのため、3キャンパス共通してカリキュラムを設定し、大学生が必要とする能力を少人数のクラスに分かれて教授することにした。しかし、当初の予定と異なり、令和2年度は新型コロナウイルスの影響により全てオンラインで授業を行うこととなった。本稿では、令和2年度から導入された大学基礎セミナー I について、オンライン授業に対応して行った取り組みを紹介し、その上で授業中に行ったWebアンケート等から得られた学生からのフィードバックを分析し、本授業の成果についてまとめ、最後にまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 学修目標及び授業の目的

学修目標として学力の3要素から以下を設定する。これらはこれから大学生活を送るために必要な能力として必要不可欠なものである。

### 【知識・技能の観点】

- 最新の学問的成果に基づいた知識を学ぶ方法を理解している。
- 大学生活を健全に送るために必要な事柄を理解している。

### 【思考力・判断力・表現力の観点】

- 様々な意見に耳を傾けて、筋道立てて冷静に考え、その場にふさわしい表現を用いて自分の意見を伝えることができる。

### 【主体性・協働性の観点】

- 大学における学修方法の着実な修得に向けて、主体的に行動している。
- 他者と協働することの大切さを理解し、グループワークなどに積極的に取り組んでいる。

これらを踏まえ、本授業では大学における学修や研究を円滑に進めるために必要な基本的知識・技能や主体的な学修姿勢を身に付けることを目的とする。具体的には、大学における授業・評価・単位について理解するとともに、さまざまな学術的テーマや内容に関するリーディング、ライティング、ノートテイキング、インターネットによる情報収集、図書館における文献検索、レポート作成、プレゼンテーション等を通じて、基本的な学修方法を身に付けることである。これらのことが記述してあるテキストを選び、『大学生 学びのハンドブック 4訂版』（世界思想社、2018年）を用いた。

### 3. 授業内容

新型コロナウイルスの影響がなく当初予定していた授業内容を表1に示す。令和2年度から始まった新課程ではクォーター制（四学期制）が採用されているため、8週で試験を含む16回の授業を実施する。つまり、1週につき、90分の授業を2回行うことになり、第1クォーターの火曜日1限目及び2限目に連続して実施した。但し、本授業では試験は行なわない。

元々の予定としては、第1週から第3週までは遠隔配信によって3キャンパス同時に各教員から講演を聞き、第3週にはそれに関連して、キャンパスごとに大学院の紹介を行う予定であった。第4週から第7週までは担当教員ごとに各教室に分かれて、教科書の内容に沿った演習を行う個別演習を、更に8週目ではキャンパスごとにポスター発表を予定していた。また、第5週では各キャンパスの学術情報センター職員による図書館ガイダンスも予定していた。

表1：大学基礎セミナー I 当初の授業内容

週	日程	授業の内容	開講形式
1	4/14	大学における学びの特徴（受動的学びから能動的学びへ） 講師：中村健一学長、馬本 勉副学長 オリエンテーション（30分）、ミニレポート（25分） 教員紹介（20分）	全体講義（遠隔）
2	4/21	大学生活（大学生としての健全な生活習慣を身につける） 講師：細羽竜也教授（大学教育実践センター副センター長） 笹倉尚子講師（大学教育実践センター） ミニレポート（25分）	全体講義（遠隔）
3	4/28	キャリアデザイン（卒業後の進路について考える） 講師：原田 淳教授（キャリアセンター長） ミニレポート（25分）、大学院紹介（20分）	全体講義（遠隔）
4	5/12	ノートのとり方、テキストの読み方、レポートの書き方	個別演習
5	5/19	資料検索、図書館の利用の仕方（学術情報センター職員による演習を含む）	個別演習
6	5/26	グループワークの進め方	個別演習
7	6/2	プレゼンテーションの仕方・聴き方	個別演習
8	6/9	まとめ（プレゼンテーション）	全体講義 （キャンパス単位）

変更後の授業内容を表2に示す。まず、問題としては8週の内容を7週で行う必要があるため、どの内容を圧縮するかであった。これを考慮する上で第3週までは本授業に必要な不可欠な講演であること、また最終週のポスター発表も本授業の集大成として不可欠であると判断したため、残りの内容について検討した。その結果、表1の4週から7週の内容を3週に短縮することとした。その上でオンラインに向けての対応を検討した。

第1週から第3週までは、オンデマンド講義として学生は自宅その他の場所で授業動画をMicrosoft Streamで視聴し、講演ごとにこちらで用意した形式に沿ってミニレポートを書き大学ポータルへ提出した。但し、馬本副学長の講演についてはWebサイトを閲覧し、そこに貼っているYouTubeのリンクをクリックすることによって動画を視聴する方式であった。ミニレポートの内容としては、まず200文字から250文字以内で講演の概要を書かせ、キーワードを3つ書かせた。その上で各教員が設定した課題について450文字から500文字以内で答えさせるようにした。これらを行うことによって、十分に視聴しないと答えられないようにさせた。第4週以降は、グループ別でオンライン授業を行った。形式は教員ごとで異なり、オンデマンド形式では学生は、短い動画を視聴し、又はテキスト等の資料を精読した上で、演習問題に取り組んだ。リアルタイム方式では

Microsoft Teamsなどを利用し、教員と学生間の質疑応答、学生同士の意見交換を取り入れながら、オンライン上で個別演習を行った。なお、第4週に行った図書館ガイダンスに関しては、学術情報センターで動画を作成し、それを視聴する形式をとった。それに加え、庄原キャンパスでは独自に映像を配信し学生から好評を得た。なお、4週目から6週目の課題は教員ごとに独自に設定した。第7週は、本授業の集大成として第1週から第3週までの内容を基にしたテーマに対し、第4週から第6週までに習得した技能を用いて個人でポスターを作成し、プレゼンテーションを行い、そのプレゼンテーションに対してグループ単位で相互評価を行った。各学生は、ポスター及びプレゼンテーションの自己評価を行うと同時に他者評価として、グループの他のメンバーの個人ポスターを評価した。また、毎週Webアンケートを実施し、理解度を確認した。

#### 4. オンライン授業への事前対応

前節でもオンライン授業による授業内容の変更点は述べたが、特にオンデマンドで行う場合の問題点として、全受講生がMicrosoft Streamにアクセスした際に動画が止まらずに見ることができるかが一番の問題であった。そこで、事前にアクセステストを行うこととした。4/22（水）9：00～10：30に3キャンパスの1年生が同時にアクセスし、動画視聴に耐えられるかどうかを調査した。調査結果、222名中8名（約3.6%）が見ることができなかったと回答した。これらの結果より、対応が必要と考え、当初の授業時間外でも見られるように動画視聴時間の延長や視聴の分散化を図るよう周知した。

他の取り組みとしては第1週目のWebアンケートで受講環境に対する調査を行った。調査内容については受講する際のデバイス、カメラの有無、通信容量、そしてオンライン授業に対する疑問・質問である。これらの結果についてはすでに大学教育実践センターから全教職員にメールで送られている。これらの取り組みにより、1年生の受講状況を把握できそれを授業に即時反映させることができたと考える。

表2：大学基礎セミナーIの授業内容

週	日程	授業の内容	開講形式
1	5/12	大学における学びの特徴（受動的学びから能動的学びへ） 中村学長（60分）、ミニレポート・Webアンケート（30分）	録画動画配信
		オンラインでアクティブに学ぶ 馬本副学長（60分）、ミニレポート・Webアンケート（30分）	
2	5/19	「大学生生活」を充実したものにするために 大学生としての健全な生活習慣を身につける 細羽教授（60分）、ミニレポート・Webアンケート（30分）	録画動画配信
		大学生生活と心の健康 笹倉講師（60分）、ミニレポート・Webアンケート（30分）	
3	5/26	キャリアデザイン 原田教授（60分）、ミニレポート・Webアンケート（30分）	録画動画配信
		原田教授（60分）、ミニレポート・Webアンケート（30分）	
4	6/2	情報検索の仕方、学術情報センター制作動画（30分）	個別演習 オンライン授業
		ノートのとり方	
5	6/9	テキストの読み方	個別演習 オンライン授業
		レポートの書き方	
6	6/16	グループワークの進め方	個別演習 オンライン授業
		プレゼンテーション（発表）の仕方について	
7	6/23	個人ポスター作成、プレゼンテーション、グループ単位で相互評価	個別演習 オンライン授業

## 5. Webアンケート結果

前述のように本授業では毎週Webアンケートを行い、学生の理解度を把握した。アンケート項目は以下の4点である。(1)講演内容または学習内容について理解できたか、(2)講演内容または学習内容は今後活かすことができるか、(3)講演内容または学習内容に対する質問・疑問、(4)講演内容あるいは学習内容に対する感想・意見。なお、第1回から第3回までは講師別にアンケートを行ったが、原田教授に関しては2コマ分提供いただいたためコマごとに行った。回収率及び結果を下の表3に示す。なお、理解度は第3回までは講師ごとにそれぞれ講演内容に沿った問いを設定し、講師によっては複数問設定した。満点は5点とし、1点が低い、5点が高い評価となる。

表3：Webアンケート回収率及び結果

週	提出数	回収率	理解度 (全問の平均値)	今後に活かせそうか
1 (中村学長)	551	98.6%	4.69	4.65
1 (馬本副学長)	548	98.0%	4.51	4.62
2 (細羽教授)	547	97.9%	4.59	4.72
2 (笹倉講師)	547	97.9%	4.79	4.79
3 (原田教授1)	546	97.7%	4.61	4.70
3 (原田教授2)	546	97.7%	4.85	4.85
4	537	96.1%	4.68	4.75
5	546	97.7%	4.72	4.79
6	538	96.2%	4.70	4.73
7	550	98.3%	プレゼンのため無し	4.81
平均	546	97.6%	4.68	4.74

表3より全ての回において各教員の声掛けもあり回収率は95%を超えた。更に全ての項目にて平均点が4.5を超えており、学生は興味を持って受講し学修を行ったことが伺える。更に全ての回の感想もほとんどの学生が記入しており、このことから学修内容が充実しており、学生が満足したことが分かる。

## 6. プレゼンテーション

大学基礎セミナーIの集大成として、最終週に各自作成したポスターを用いたプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションに用いるポスターは当初少人数のグループで実際にマジックを用いて、A1サイズのポスターを作成することを考えていたが、オンライン授業に伴いグループを個人にし、更にキャンパスごとを教員ごとのグループに実施単位を小さくして行った。ポスターは基本的にMicrosoft Word 1ページで作成し序論、本論、結論の構成で行うように指導した。テーマについては第1週から第3週に関わる内容に基本的に限定したが、担当教員の専門分野についての発表も一部あった。広島キャンパスにおける各担当教員が挙げた優秀ポスターのタイトルを表4に示す。表4より、第1週から第3週の内容全てがテーマとして挙げられている。

表4：優秀ポスタータイトル（広島キャンパス地域創生学部）

オンラインにアクティブに学ぶ	社会に出て活躍できる人材になるため、大学生のうちに行えること
キャリアデザインを実現させる上でのコミュニケーション能力の重要性について	主体性と人の思考について
就職に向けて今から出来ること	キャリアデザインについて
高い離職率は悪なのか？	アクティブ・ラーナー
現代の教育を背景としたアクティブラーニングの重要性	これからの社会で求める能力、スキルについて
音楽と心	これからの社会で求められるスキル・技能について
学生のアレルギー・ハラスメントの原因について	能力開発の基本「あいさつ」の重要性について
大学生の人間関係について	異文化理解について
課題探求型地域創生人材について	若者の現代の人間関係について
社会人基礎力 前に踏み出す力	対人関係に関する悩みとSNSについて
異文化交流について	心の健康を保つ上での理解と対処の重要性について
日本と海外の制服の違い～制服に対する考え方の違いから～	「大学生活」を充実したものにするために
和食衰退の原因を探る	トラブルを未然に防ぐ方法について
大学における学びの特徴について	コミュニケーション能力について（キャリア理論）
大学における学びの特徴について～学びの本質に着目して～	

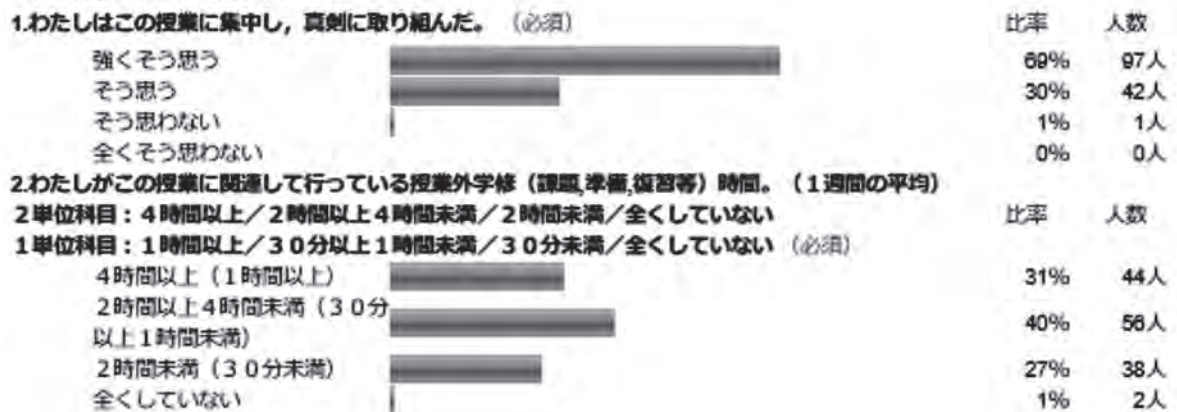
## 7. 学生の感想等から見た本授業の成果

5節で述べたWebアンケートでは95%以上の回収率を得ることができたため、KH coderを用いて感想を分析した。KH coderはテキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアで、他の授業（広谷ら、2020年）でも学生の感想や成果・課題に用いて解析している。KH coderを用いた分析法はいくつか存在するが、今回は共起ネットワークを用いた。共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークであり、線で結ばれたもの同士には強い関連があることが示され、一緒に文章として出てくることが多いことを示している。但し、図上で点線と実線が存在するが、グループ分けの結果、同じグループ同士で結んでいるものが実線、違うグループで結んでいるものを点線で結んでいる。また、円の大きさは出てきた回数を表す頻度を表し、円が大きいほど多く出ていることを表す。このような図に表すことで学生が何について多く書いたのかを把握することが可能となる。本授業の集大成である最終週第7週の感想および第7週で行ったポスター発表の他者評価に対する共起ネットワークを図1及び図2にそれぞれ示す。なお、図1については回答数550名の結果であるが、図2では基本的に1人あたり7名を評価するように指導しているため、延べ回答数が $550 \times 7 = 3850$ となり、図1と異なり総回答数は多くなっている。但し、7名を評価していないグループも一部あるが、それでも図1の550よりは確実に多くなる。よって、円の大きさが同じでも図1と図2では数が違う。

図1では8つのグループに分かれた。一番円が大きいグループに関しては「自分」、「ポスター」、



A.あなた自身についての質問



B.授業と教員についての質問

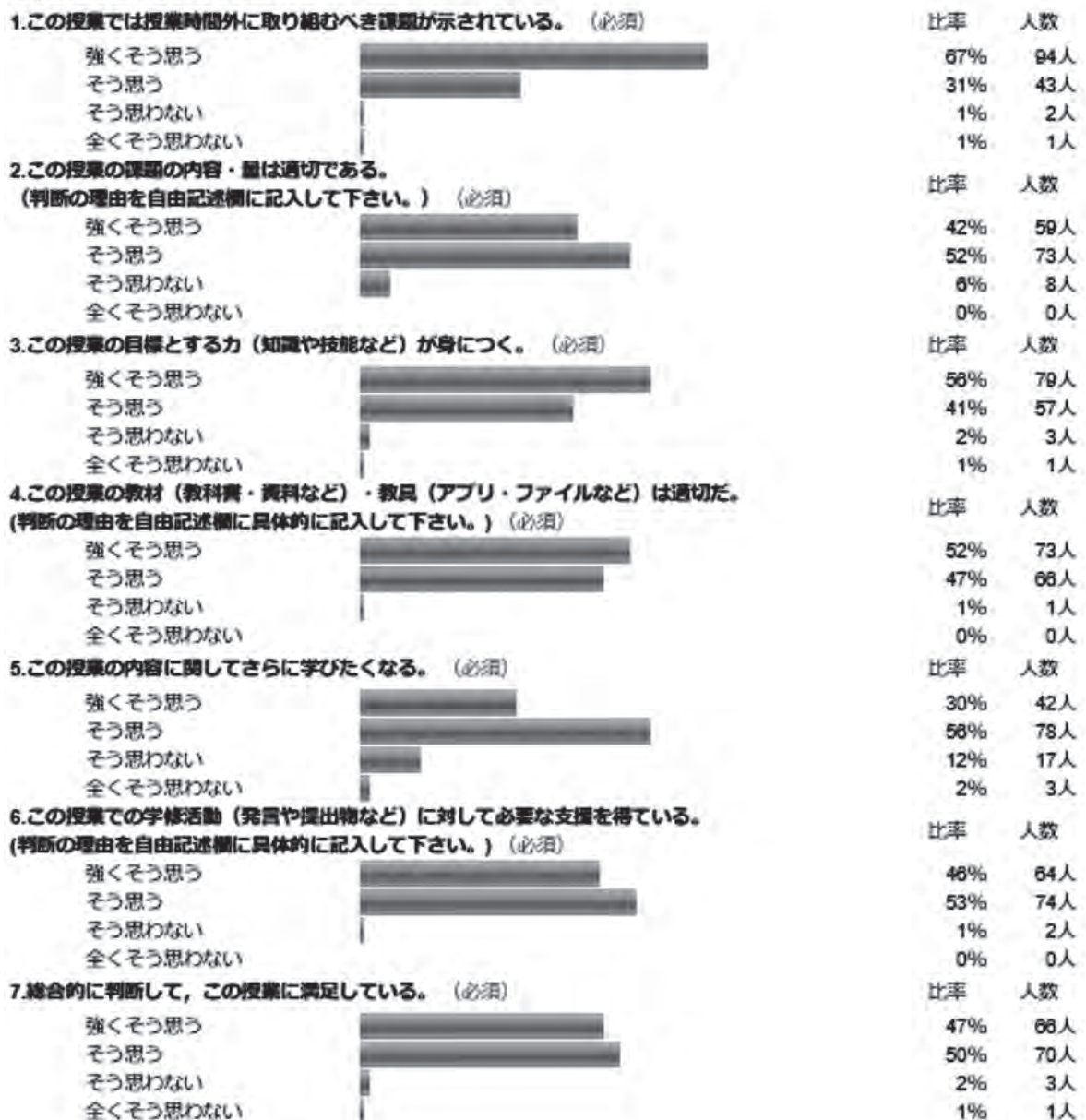


図3: 授業評価アンケート結果(広島キャンパス地域創生学部)

「発表」、「人」、「思う」が多く頻出して結ばれていることから、自分のポスターを人に発表したという感想が多かったことが読み取れる。また、「緊張」や「参考」も特定の単語に結びついていることから、発表に緊張したことや他の人の参考になったことが読み取れる。同様に他のグループについても読み取ることができる。例えば、大学生活に活かす、それぞれのテーマにおいて違った視点で見ることができた、準備が大変であった等である。このように共起ネットワークにすることによって学生が多く感じたことを抽出することができた。

図2では総回答数が多いためグループも多くなり、11のグループに分かれた。また、回答の中で一番多かった単語は思うであった。思ったこととして良い、分かるが結ばれているため学生が良かったこと、分かったことを認識して書いたことが読み取れる。結びつきを見ると具体例としては、説明が詳しく書かれていた、グラフ・図を用いていた、重要な部分に色を使っていた、自分の意見・考えを述べていた等が挙げられる。更に、本授業及び講演で出てきたキーワードで序論・本論・結論やストレス・大学生活・心等も出現した。以上のことから、第1週から第3週のテーマの中からストレス・挨拶・大学生活等を選びポスターにまとめ、かつ必要とされる能力や方法について学修できたことが読み取れる。

また、授業後に行った授業評価アンケートでも高い評価を得ることができた。広島キャンパスの結果を図3に示す。回収率が65.4% (213名中140名)と少し低いが、5. の「この授業の内容に関してさらに学びたい」の項目以外はほとんどそう思わない・思わないの回答が一桁で満足度はほぼ90%以上だった。なお、初年次導入科目のため、他の項目に比して5. の「この授業の内容に関してさらに学びたい」の項目がやや低調なのはやむを得ないと考える。以上の結果より、学生にとってこれから学生生活を送る上で意味のある授業であったことが分かる。

## 8. まとめと今後の課題

本稿では令和2年度から始まった大学基礎セミナー I に対する取り組みとその成果について述べた。特に、令和2年度は新型コロナウイルスの影響によりオンラインで全て授業を行なわなければならず、当初の予定から変更せざるを得ない点があった。しかし、オンライン授業に対して対策を施した結果、学生は対面授業あるいはそれ以上に学修し、授業の目的を達成したことが収集したデータ等より明らかになった。

本授業の特色である個別演習のあり方については引き続き検討を重ねる必要がある。今年度当初は全学的に15人程度の少人数で対面による個別演習を想定しており、オンラインによる質の担保が可能かどうか懸念された。これまで示した結果でも明らかになったようにある程度目的は達成されたと考えるが、対面授業のようにきめ細やかに指導させるような工夫が今後の課題となる。また、オンラインに関係なく本学独自の授業としての特色を更に出すことも担当教員から指摘されており、今後の課題となる。

## 参考文献

世界思想社編集部編、大学生 学びのハンドブック [4訂版]、世界思想社、2018年  
KH coder, <https://khcoder.net/> (2020年11月21日閲覧)



広谷大助、五條小枝子、藤井宣彰、吉田倫子、馬本 勉、「地域情報発信論」の授業改善：振り返りシートと指定課題の導入によって、第26回大学研究教育フォーラム、京都大学、2020年